

『西鶴諸国はなし』巻四―二―

「忍び扇の長歌」について

一

数多くの西鶴作品中より、今、『西鶴諸国はなし』巻四―二―、「忍び扇の長歌」という一篇をとりあげてみようというのは他でもない、この作品が、従来、殊に議論の対象となり、その幾多の説を整理してみるだけでも、西鶴研究の方法の推移といったものが端的にここに集約されているといった感じの、まことに興味深い様々の問題をはらんだ一篇だからである。

本稿は、この一篇に対する従来の諸説の代表的な「読み」を整理しつつ、そこからさらに本稿なりの読み方を考えてみようとするものである。

問題の「忍び扇の長歌」という一篇は、次のような話である。

上野の山の花見において、折から通りかかった高時絵の乗物の窓の簾の隙間から、二十歳あまりの美しい姫君の姿が見られた。これを垣間見たのは、中小姓くらいの、女に好かれそうもない男である。あまりの美しさに姫を恋い初め、行列の後をつ

岩 田 秀 行

いてまわり、ついに仲間なかみに尋ねて、姫の住居すまいを知り、伝つとを求めて奥向きの奉公をすることができた。二年程勤めて、あちこちの御供をしているうちに、誠に縁は不思議なもので、いつとなく姫君も男を慕うようになった。ある日、姫君は男の住んでゐる長屋の窓に長歌ながうたを書いた扇を投げ入れさせた。読んでみると、「今宵自分を連れて、かけおちする様に」という意味である。男は感激をし、いかなる苦勞をしても姫君と添まいとけようと決心し、その夜のうちに姫君を連れて立ちのき、土器町かわらぎまちの裏長屋を借りて隠れ住んだ。ところが、着のみ着のまままで御屋敷を出たため、すぐに生活に困り、姫の守り脇差を質に置いたり、男が切疵の膏薬を売ったりしたが、生活が立たず、ついに姫君は今までしたこともない洗濯の仕事をやるほどで、近所の噂ともなり、とうとう半年余り過ぎた頃に捜し出されてしまった。男はすぐに処刑、姫は一室に閉じこめられ、自害をしむけられるが、姫に自害の様子が見られない。大殿もいら立ち、不義の上は早く自害するようにとの命めいを伝えさせる。すると姫は、そ

の使者に、「私は命が惜しいわけではないが、不義とがめられる筋合いはないので、生き残っているのである。不義というのは多数の男性と契りをおこなうことである。あの男は、たまたま身分は低いけれども、男女の縁によって契りをおこなしたのであり、私にとつてたった一人の男性ということにかわりはない。身分違いの恋というのは昔から例のあることで、あの男を殺すべきではなかったのだ」と涙を流して訴え、ついに男を弔うために出家をしたということである。

## 二

この一篇の話に対して、まずその議論の口火を切ったのは、科学者の寺田寅彦氏(注1)であろう。寺田氏は、この話の後半部分、姫君の言葉に、西鶴の自由恋愛論が読みとれるとし、

西鶴は当代としては非常に飛び離れた性道徳観の信奉者であつたと思はれないこともない。少くも、恋愛の世界を勧善懲惡の繩張から解放すべきものと考へてあつたのではないかと思はれるふしが少くないのである。これ等の……恋愛観は、或意味から兎も角も唯物論的な西鶴の立場を窺はせる窓口となるのではないかと思はれる。

と述べて、西鶴の科学的な眼ということに注意を与えた。

これを受けた国文学者は、おもにその自由恋愛論のほうに注目し、近藤忠義(注2)氏は、

身分賤しい侍と契つたお姫様の、一個の生ける人間としての、旧い形骸化した道徳に貞操観に対する極めて強硬な抗議が示さ

れてゐる。

と述べて、ここに一種の「人間主義とも言ひ得る思想」を読み取つた。さらに、暉峻康隆(注3)氏も、

令嬢の主張の根本は、いふまでもなく恋愛の自由である。それは封建制度が身己保存のために扼殺してはばからない人間性の解放であり復活である。……一夫一婦の思想は封建的な儒教道徳にもとづくものであるといはれ、あるひはまた封建的な父系による私有財産継承の要求するところとも説かれてゐるが、しかし令嬢の場合は、さうした人為的な掟を否定し超越して人性の自然にしたがひ、命をかけた愛情の必然的な帰結として提示された貞潔の觀念であるところに、絶世の新しさと正しさがあらうといふべきである。

と述べて、この一篇に、「反封建的な」「新しく正しい恋愛のモラル」を読み取つたのである。つまり、この近藤氏・暉峻氏の立場の新鮮さは、西鶴の時代と西洋の「文芸復興」とが類似の時代として浮かび上ってくるということであらう。

それに対して、重友毅(注4)氏は、

この姫の「不義」に対する解釈……をもつて直ちに西鶴の進歩性を云為するならば、それはやや皮相な解釈といわねばならぬ。

とし、また、村田穆(注5)氏も、

この一節は、西鶴が自由恋愛を主張した。若しくは、封建制度に対する抵抗を示した。などと……しばしば……引かれるところですが。この意見の重要さに気づいたのは結構ですが、読み方

には今少し注意を要します。

として、この一篇に西鶴の進歩性を讀みとらうとする解釈に疑問を呈した。

(註6)  
そして村田氏は、西鶴および近松の作品より、当時の婚姻についての考えがうかがわれる部分を引いて検討を加え、

未婚の男女の交渉に嚴重な取締りを、町人は必要とさせません。武家社会の亜流みたような明治の中産階級などよりは、十分に自由でした。……恋愛から結婚するか、恋愛とは別に結婚するか、それは兎も角、乱婚雑婚では困ります。婚後は、一夫を守るやう、一婦を守るまでには至りませんが、そこらに婚姻の基調を置かうとします……町人の婚姻について、西鶴が「女の一生に男は一人」といふ意見を、而も強烈に抱いてゐたといふことは、はつきりしませう。「忍び扇の長歌」で、武家の姫君を持ち出したのは、「五人女」で、「さりととは口惜き下く」の心底なり上くにはかりにもなき事ぞかし」と強調した具体的例なのです。上流に範を求めることが、町人の事大根性に最もよくうつたへるところだったので。「女の男只一人持事、是作法也」といふ意見を、町人に納得させようとするのが、「忍び扇の長歌」の意図だったと断定して、誤りはありませんまい。

(註7)  
また重友氏は、西鶴がもし自由恋愛論を主張する意図であるならば、ここに描かれた男女主人公の極端な身分の隔たり、また美醜の相違という関係は、もつとまでもでなければならぬとし、この二人の奇妙な取り合わせに注目して、

一見結びつきそうもない美醜の男女が、意外にも求め合う場合のあることは、彼(西鶴)が男女関係において見た一つの「不思議」であり、したがってまた世に伝えたい事実でもあった。そうだとすれば、すでにいわゆる「不義の出奔」を、武家社会の出来事として取り上げたこの説話は、その事実を強調して示すのに恰好の機会を提供するものであった。こうしてそれ(美醜の男女の結びつき)は、おそらく素材(当時の武家社会における不義出奔の実例)そのものには備わらなかつたものであり、作為として新たに加えられたものと思われるが、それも単なる余興としてではなく、むしろ中心題目として取り上げられたものと考えられるのである。

と述べ、こうした美醜の男女が結び合うという人情の特殊事例を挙げることによって、そこに人間の生態を奥深く追究しようとしたのが、この一篇であるとした。つまり、重友氏は、この一篇を、『諸国はなし』という作品群中に置いて考えているのであり、『諸国はなし』の執筆意図を、非日常的な人間の諸相を多種多方面にわたって収録するということにあると読みとった上で、この一篇の読みを、「男女の不思議な縁」としたわけである。

こうしてみると、この村田氏・重友氏の立場は、それ以前の論が、「文芸復興」という西洋文芸的または近代文芸的な概念との重

なり合いをもって、この一篇を読もうとしていたとも言えるのに対応し、西鶴の作品群の中に、この一篇を置きもどして考えてみるのだという立場において、共通しているということができよう。

### 三

昭和四十年代に至ると、さらに新しい展開が起こる。それは、この一篇の原拠と目される話を指摘し、それとの関係で主題を論じようとする傾向が生まれたのである。

A、宗政五十緒氏「西鶴と仏教説話」三

〔文学〕昭41・4

B、金井寅之助氏「『忍び扇の長歌』の背景」

〔文林〕1、昭41・12

の二説がこれである。しかも、この二説は、それぞれ全く別のものを原拠と考えているのである。A・Bがそれぞれ原拠として掲げるものは、

A、『更級日記』に書き留められたものと同系統の「竹芝寺縁起譚」の口碑。

B、天和二年、大和宇陀松山藩の「矢都姫事件」である。

まず、A説の『更級日記』に書き留められた、「竹芝寺縁起譚」<sup>(注8)</sup>とは、次のようなものである。

武藏国から皇居の衛士に上った男が庭を掃きながら故郷の歌をうたっていると、それを皇女が聞いて、自ら、そこへ連れて行くよう命じた。男は皇女を背負い逃走し、故郷へ帰った。宮廷

では皇女を捜し、三か月たつて公使が男を尋ねてきたが、皇女は皇居へ帰らぬといったので、天皇は皇女の望みを許し、男に武藏国を預けた。皇女の住んだ家は、死後、寺とした。これが竹芝寺である。

もっとも、宗政氏自身、西鶴が『更級日記』を読んだ可能性は少なく、むしろ、江戸の芝あたりに口碑伝説として伝えられた、右と同話によつたものであらうとする。

しかし、①筋・人物の構成が非常に類似していること、②土器町の場所が竹芝寺と近いこと、③衛士の男のつぶやきにでてくる酒壺が土器と縁のあること、④また、このつぶやきは民謡的で姫の恋文が長歌で認められたことと関連が考えられること、等の諸点において、まことに両者は類似的ということになる。そして宗政氏は、

この篇を原拠と重ね合わせて見ると、最も大きな相違は……終末が幸福で完結するか(竹芝寺縁起譚)、男が成敗され女が髪を下ろす不幸に終るか(『忍び扇の長歌』)であり、そして古き時代は幸福な結末であり、新しき時代たる当代は不幸に終るのである。……西鶴は身分の相違する男女の恋が現実存在していることを知っており、又それが屢々不幸な結末をもたらすことをも知っている。……しかし、それ(≡身分違いの恋が不幸な結末をもたらすこと)は如何なる時代でも成り立つ論理ではない、少なくとも古き時代では周囲の理解によつて幸福に終るのである。それが何故、当代においては成立しないのか、西鶴のこの一篇の作意はこの疑問にあるのではないか。

と述べた。つまり、西鶴は「過去の事実」を支えとして、封建制倫

理の首肯し難さを提示したのだというわけである。

ただ、この宗政説に対しては、高橋俊夫<sup>(注9)</sup>が、

竹芝縁起譚を想起しなくては一篇の作意が明らかにならない訳ではなく、又読者にそれを作者が要求している訳でもない。

「諸国はなし」は貞享二年、大坂の池田屋三良右衛門に依つて開板せられた。少くとも大坂の読者に「忍び扇の長歌」から、江戸芝あたりの口碑の想起を要求するのは、一般的にはムリであらう。……竹芝寺縁起譚が執筆に当って、ヒントの役を果したかも知れぬという推測は成立つとしても、土器町までを、それに結びつけるのは、どうも、付会とし……た方が良さそうに思われるのである。(傍点原文)

と疑問を呈し、「土器町」が選ばれたのは、江戸の地理にもかなり精通していた西鶴が、駆け落ちの男女が逼塞するのに、適しい場所を選んだまでなのであるとの説を述べていることも付け加えねばならない。

また、B説の「矢都姫事件」とは、次の如きものである。

織田山城守の姫君は江戸に腰入れをしたが、ほどなく離縁となる。家老浅津治左衛門(知行五百石)が、大和宇陀の国表より姫を迎えに來、御供をして帰る途中、姫君に京都見物をさせたく思い、御供を途中より帰して、京へ廻り道をする。ところが、姫は病氣となり、全快まで京都に半月余り滞在してしまふ。藩中では、治左衛門が姫に恋慕をして、このようなことをしているのだと噂が立つ。ついに、これが殿の耳に入り、姫は宇陀に帰るや否や一室に押込められる。また治左衛門は閉門となり、

ついに刺客のために殺される。

金井氏自身も述べる如く、この話は類似性において、原拠とするのにやや躊躇を覚えるが、宇陀と大坂との密接な関係、また「忍び扇の長歌」の挿絵の着物の模様が、宇田松山藩織田家の「窠」の紋に似ていること等を考えあわせると、西鶴がこの事件を念頭に置いていたということも充分有りうることで、大名への憚りから、モデルを忠実に描くことを避けたとするのが金井氏の考え方である。

そして、この原拠との対比から浮び上ってくるのは、当時、身分違いの密通では女性死ななくてもよかつたにもかかわらず、「忍び扇の長歌」では、死なねばならぬ境地に姫君を立たせる、この境地の設定こそ姫の主張を力強く打出すために必要とされたことで、

自害を迫られて応ぜず、「世の定まりごと」を批判して、その主張を貫いて尼になるあたり、芥川龍之介や菊地寛などの新理知派の趣がある。西鶴の素材の処理の一つの方法なのである。

実録はここで文学となる。大名や家老や世間は、世の作法にはづれた愛情のふるまひを不義といひ、姫は、愛情の真実にそむくのを不義といふ。さういふ考へ方の、或は心理の、くひちがひから起る悲劇に、さういふ悲劇を起す人間の心の微妙な動き、或はさういふもの抒情に、この篇における西鶴の作意の一つがあるのではないか。

というふうに金井氏は読みとるわけである。

つまりこの、作品の原拠をさぐるという立場は、この作品が生まれた当時の人達が共通に前提とし得た知識を探ろうとする試みであるといつてよいであらう。あるいは、それは古典という歴史上の

産物である場合もあれば、また社会的事件という同時代的産物である場合もある。それ以前の論が、西鶴作品群という解釈の場を考えたのに対して、この立場は、さらに大きく、いわば「通時的」な場を、あるいはまた「共時的」な場を作品に与えようとしたものであるといえそうである。

#### 四

さて、こうしてまったく異った二つの原拠説が対立することとなったが、これに対して一つの解答を与えようとしたのが、井上敏行氏『忍び扇の長哥』の方法

（『国語と国文学』昭50・12）である。井上氏は、A説（竹芝寺縁起譚）とB説（矢都姫事件）とが、同時に「忍び扇の長歌」に取りこまれているとするには、両者はあまりに隔っているところから、どちらかを誤まった説と考えざるをえないとする。そして、B説の「矢都姫事件」を原拠と考え、それを中将姫伝説や『伊勢物語』を媒介として処理し、一篇のオチのきいた咄に仕立て上げたのが、「忍び扇の長歌」であるとした。つまり井上氏は、原拠素材によって直接的に作品を解釈するのではなく、素材がどのように処理され作品化されたかという、その過程に西鶴の創作手法を読みとろうとしたのである。

例えば、宇陀の「矢都姫事件」は、謡曲「雲雀山」の連想から、  
矢都姫→宇陀→雲雀山→中将姫

と、「中将姫」に結びつく、すると、中将姫を自害させようとする話柄や、中将姫末期の説法から、「忍び扇の長歌」後半部の、自害

の強要と姫の恋愛感の開陳という構成が生まれるのは自然の成り行きとなる。また、

宇陀松山藩→江戸藩邸→業平伝説

という連想の糸をたどって、江戸という舞台の設定、高貴な女性を盗む話などの構成が導き出されるはずである。こうした手続を経、井上氏は、

結局、「忍び扇の長哥」一篇に見られる方法は、原素材Ⅱ矢都姫事件を、媒材Ⅱ中将姫伝説・『伊勢物語』によって、原素材の佛をほとんど残さないほどに、岡西惟中のことばをかれば「あらぬ事にしなす」ことであった。……「忍び扇の長歌」一篇の方法を以上のごとくに見た場合、西鶴がこの一篇で何を語るうとしたかという問題も、当然、従来とは異った解答が導かれることになる。西鶴は、目次の下の見出しに「恋」と書き、一篇の主題を明示していたわけだが、この「恋」は、『伊勢物語』の現代版、あるいは中将姫の現代版というべき、滑稽な「恋」の咄であったといわねばならないのである。

と述べる。この井上氏の立場が決定的に新しいのは、井上氏自身が、  
従来この一篇に対する解釈に、ともすれば近代主義的な解釈が多かったのは、アプリオリに西鶴の人間主義を前提し、滑稽の仕組そのものを見究める作業が不足していたからではなかったか。

と述べるように、従来立場が、様々な方法をとつつも、文学とは人間を描くものであるというような、所謂近代的文学観の残滓を

どこかにひきずっていたのに対して、その「反定立」として、「滑稽の処理」という主張によって、すべてを説明し尽くしてみせたいという点においてである。この「滑稽の処理」という概念が、当時の第一文芸である「俳諧」の中心理念であることは、井上氏の立場を充分に正当づけるものであらう。

このように、「忍び扇の長歌」という、この一篇の研究史をふり返ってみただけでも、そこに積み重ねられた様々の解釈から、向井芳樹氏の述べる如く、研究の在り方についての議論を引き出すことも出来ようかと思われるが、今その用意のない本稿では、そうした抽象的問題に深く立ち入ることが出来ない。ここではただ、この研究史を整理してみて感じた、一つのきわめて具体的な疑問に対して、本稿なりの解答を与え、そこから導き出される一つの「読み」を提示することを以て、本稿の役割りとしておきたい。

## 五

井上氏の説は、その精査な手続きによって、いささかの瑕瑾も無きまでに、金井説（矢都姫事件原拠説）を証明し得たかの感を与える。ことに、話の後半部の中將姫の佛や、挿絵の稗風の模様などは大変有力な証拠たり得ていると思われる。しかし、それでもなおかつ、話の前半部分、奉公人と姫君との恋愛駆け落ちというストーリーは、（注11）金井氏も、

「忍び扇の長歌」を読んで誰しも聯想するのは、更級日記の皇女の衛士と武蔵の国に狂奔される条であらう。

と述べる様に、「竹芝寺縁起譚」との類似性の方が強いという思い

を禁じ得ない。本當に宗政説（竹芝寺縁起譚原拠説）を否定し去つてよいものであらうか。

井上説は、宗政説・金井説のうち、どちらかが誤りであるという前提で出発している。しかし、両説ともに捨て難いものがあるという思いを禁じ得ぬ今、井上氏がとつた前提以外に、両説ともに正しいのだとする前提を考えに入れてみてはどうであらうか。まことに、「竹芝寺縁起譚」と「矢都姫事件」とでは、両者はあまりにも掛け離れているが、井上説によって、「矢都姫事件」は「中将姫説話」と連想関係になり得ることがわかつたのだから、これを「竹芝寺縁起譚」と「中将姫説話」とに置き換えて考えてみたらどうか。つまり、もし「竹芝寺縁起譚」とも関わりを持ち、また「中将姫説話」とも関わる様な話が見つけられれば、これによって、井上説に感じた疑問は解消するのではないだろうか。これは、確かに一つの見通しである。ただ、これに具体的解答を与えることは、大変困難と言わねばならない。

しかし、前掲の向井氏の論文は、この解答への一つのヒントを与えてくれるものではないかと思われるのである。それは、「忍び扇の長歌」と『男色大鑑』卷三―五、「色に見籠は山吹の盛」が構成上類似点を持つているという指摘である。両者の類似点があげられているうちで、一つ抜け落ちていると思われるのは、「井戸」のことである。「忍び扇の長歌」は、姫がすすぎ洗濯をするその場面を挿絵にして、井戸が描かれている。それに対し、「色に見籠は山吹の盛」も、「榎のは井の水有里に隠れ住居」するということになつている。

これは、身分違いの恋の話が、何か「井」にまつわる話として流布しているのではないかという暗示を与えてくれる。このヒントに従つて、これに適するような話を捜してみると、柳田国男氏『桃太郎の誕生』（『定本 柳田国男集』第八巻所収）の中に、卑しい男が面白く珍らしい言葉の力によって優れた配偶者を獲た話として、「山田白滝譚」を挙げているのに行き当たる。これは、諸國の山田という地名の場所に伝わる話で、摂津の丹生山田の粟花落家伝をその代表とするようである。『撰陽群談』巻八（元禄十一序、十四刊）に、これを「梅雨井」として掲げてあるのは、まさに先程のヒントに答えるものと言わねばならない。今、『撰陽群談』のその項を開いてみると、次の様にある。

梅雨井 矢田郡丹生山田庄原野村、粟花落理左衛門第宅ニアリ。水ノ涌出ル間、長四尺餘、渡三尺、深一尺、常ニ無水而如三沙。梅雨ニ入テ必涌出ス。是水ロノ数ヲ以テ入梅ノ日ヲ定ム。因テ以テ地主ノ姓ト成、世ニ粟花落左衛門ト称ズ。五月粟ノ花ノ落ル頃、必ズ梅雨ノ時節成ガ故、三字ニ作。家記云、始祖山田左衛門尉真勝（姓名考）ハ、人皇四十七代廢帝天皇御宇、朝ニ奉仕ス。于時、横萩右大臣豊成卿息女、白滝姫ヲ恋テ斯ト云ヤリス。白滝一首ノ和歌ヲ送ル。

雲ダニモ懸ヌ嶺ノ白滝ヲサノミナ恋ソ山田男ヨ

ト讀テ、及ナキナンド云テ難面カリケレバ、猶アコガレス。是

ニ返事申バ得サスベシト有ケレバ、真勝ヤガテ、

水無月ノ稲葉ノ末ノコガル、ニ山田ニ落ヨ白滝ノ水

ト書テ送リケレバ、豊成卿、彼ガ心ザシノ浅カラヌ事ヲ感シ、終ニ帝ニ奏シテ、白滝ヲ真勝ガ家ニ送ル。穀慮不浅、真勝ニ天国御劔（長二尺六寸五分也）ヲ賜ヌ。當家重寶ノ第一也。白滝世ヲ早ス。于時仲夏ニ當リ。遺骸ヲ第宅ノ東境ニ葬ルベシト也。終ニ納藏テ叢祠ト成シ、辨財天ト祀祭ル。其地ニ就テ此水涌出シ、至ノ今梅雨ヲ知シム。白滝女ハ和州當麻寺ノ開祖中將法女ノ妹也ト云リ。

この話が「井」と関連するのは、柳田国男氏によれば、この説話は地下水の出没に基づく口碑の類で、粟の花の落ちる梅雨の頃になると常は水のなかつた霊地の一隅に清い水の湧くのを水神の奇蹟とし、その家の彙祖と水の神との婚姻を説くものであったということによるものようである。姫の携えて来たという「天国の劔」もまた、雨にまつわる劔であり、水との関係を見ることができるわけである。この水の神との婚姻の話に與を添える話柄として高貴な上臈を得る話が付け加わつた如くであるが、『更級日記』の「竹芝寺縁起譚」もこの系統に属する話であることは、例えば「竹芝寺縁起譚」と類似のストーリーを持つ、『大和物語』第一五五話（および『今昔物語』卷三〇、「大納言娘被取内舎人語」第八）を見ても、それが「山の井」と結びついて語られていることから考えられよう。「竹芝寺縁起譚」には、この水との関わりが欠落しているのであるが、『芝区誌』第四編第二章（昭13・3）によれば、この話は「亀塚」「三田」という地名にまつわる話と理解でき、そうすると『石川泉鳳至郡誌』（大12・3）所掲の「田舎の黒鳥」と同類ということになって、やはり「山田白滝譚」と同系統と考えておいてよい



と思われるのである。

こうしてみると、「山田白滝譚」という、「井」にまつわる身分違いの恋の話は、実は「竹芝寺縁起譚」とまったく別の話なのではなく、ただ近世期においては、これが「山田白滝譚」という形で流布していたということなのである。従つて、「忍び扇の長歌」のストーリーとしては、「竹芝寺縁起譚」よりも、「山田白滝譚」を採用する方が適切であるということになる。しかも、この「山田白滝譚」は「中将姫説話」と関わっているという点において、今一層その有力性を増すと思われる。つまり、この話の女性主人公である「白滝姫」は、「中将姫」の妹ということで語り伝えられていたわけで、これは前引の『撰陽群談』に限らず、『京童跡追』（寛文六）に、

廢帝天皇の頃、右大臣豊成公の息女中将姫の妹に白滝の前といふあり

また、『兵庫名所記』下（玉永七）に、

山田左衛門尉真勝は、四十七代廢帝天皇の御宇、朝廷につかへしときに、横秋右大臣豊成の卿の息女白滝姫を恋佐て、

中将ひめの妹

と、諸書に等しく記されるところである。

こうして、ここに、「竹芝寺縁起譚」とも関わり、「中将姫説話」とも関わる話として、「山田白滝説話」という具体的な答えが提出されることが明らかとなったわけである。そこで本稿では、「矢都姫事件」にこの「山田白滝説話」を併せ加えて、「忍び扇の長歌」を考へてみるという立場をとることにしたい。が、その前にこの

「山田白滝説話」の流布形態について、もう少し検討を加えてみることにする。

## 六

西鶴の時代に、この「山田白滝説話」が、丹生山田の栗花落家の所伝として流布していたことは、前引の『撰陽群談』（元禄十四）、また遡つて、『京童跡追』第六（寛文七）にも同じ内容が見えることから明らかであるが、さらにこの説話を西鶴自身が知っていたであろうことは、『一目玉銚』巻四（元禄三）に、

○生丹の山田 ○栗花落の宮今に有とあり、また俳諧にも、

穴のあく程見る立すかた

涙雨つゆさへもんやふらすらん

丹生の山田は植時になる

（『独吟一日千句』第七、延宝三）

看板の鼻のさきより雨かふる

つゆ左衛門かあなはふたつしや

西鶴

（『両吟一日千句』第五・雲峯、延宝七）

の付合があることによつても知られる。右の付合については既に高

橋俊夫氏の指摘するところであるが、それ以外にも、

鼠のかよふ穴秋津国

墜栗の雨をしらへの道の夜をこめて

（『三鉄輪』、延宝六）

の例があり、また西鶴の周囲においても、

あなのあくほと君か只みる

丹生の山泪の雨やしらすらん

今治西畑

『物種集』、延宝六)

男日照なき世成けりツルメ左衛門

辰寿

『句箱』第三・梅雨、延宝七)

等と詠まれている。そして、この「山田白滝説話」が近世期を通じて広く流布していたことは、古浄瑠璃『丹生山田梅雨左衛門由来』(元禄五)に、梅雨左衛門としら竹の前が雨にまつわる筋立に構成され、並木宗輔の浄瑠璃『丹生山田青海鏡』(元文二)には、源氏六十帖の世界に丹生山田の話を超向し、山田の長と娘入梅、天国の劍等が、やはり雨にまつわる筋で仕組まれ、黒本『入梅左衛門名所井筒』(宝曆八)にも、豊成公と中将姫、白玉姫の姉妹および入梅左衛門が登場し、雲雀山と山田白滝とをなймаぜた構成となっている。等というこうした例からも明らかである。

そして、もっとも肝心な、この「山田白滝説話」が、どのような筋でもって流布していたかということは、『撰陽群談』等の地誌類では、骨組みのみで、ややわかりにくい、もっとも参考になりそうなのは、歌謡の兵庫口説中「山田の露」と題する一篇である。今この本文を、諸本を参照し(註五)つつ家蔵の一本(姫路せんば御堂前灰屋輔二板)によって掲げておく。

山田のつゆ 甚九ぶし

ゑんじふしぎなものにてござる、ちんじよこはぎとよなりこ  
よ、あねたゑまのちうせうひめよ、いともしらたき二八のす  
がた、一のきざぎにそなかりたまふ、ゑいくわはなはだかぎり

なし、こゝにつのくにやまだのたに、りざへもんとてかしこ  
きおとご、たいりしらすのふにとられつゝ、ちりをひろふてつ  
とめていたが、みすのこひかせふまくりつゝ一のきざぎのし  
らたきさまの、つぼねまるねの御すがたをバ、一め見るよりはや  
こひとなり、けふかあすかのやまひとなりて、もはやつとめに  
いでざりければ、あなたこなたへもれきこへつゝ、ついにだい  
りの御みゝにいり、じひなかみよりめしくだされて、なんぢこ  
ひするそのこゝろざし、さてもやさしやしゆしやうなものど、  
こひにつぼん天ぢくまでも、たかきやしきへだてぬない  
ぞ、一ッしゆつらねようたよむならば、のぞみかなへてゑさせ  
んものと、じきにきよかんのありがたや、そこでおとことしら  
たきさまと、りやうほうたかひにちゑくらへにて、やがて百し  
ゆのうたよみたまふ、すゑのおちくにしらたきさまのよませ給  
ふぬくもたにの、にこりかゝらぬ此しらたきを、心なかけそや  
まだのおとことゑそバしければ、そこでおとこもまづとりあへ  
ず、みなづきのいなばのつゆとこがれつゝ、やまだにおちよし  
らたきのみづとよみ上げれば、きみをはじめてくげ大じんも、  
さてもあつはれ御めいかやと、上下ざぶめきほめ給ふ、ときに  
きみより御ほうひにて、いとしさかりのしらたきさまを、りさ  
がにようぼとなをつかけかへて、つれてかへれとめし下さるゝ、  
いゑのたからなかのうすずみに、まもりかたならむこひきでも  
の、くらゑきづがる御まきものを今にふしぎなわきでるつゆの  
今の上までも山田のととの、なんほめてたのなわか松よき  
この本文を読むと、まず「縁は不思議」「御簾の恋風」「恋に上す

のへだてではない」等という表現が目につき、「忍び扇の長歌」はあ  
る(注16)はこの本文に拠つたのではないかと思わせるほどの表現の類似  
性を感じるが、しかし、諸書の解説によれば(注17)、兵庫口説は享保頃、よ  
り大坂地方に行なわれた踊口説の一種で、西鶴時代までは廻り得な  
いものであることがわかる。ただ、この「山田の露」は、現在に残  
る盆踊りにおいても、ほとんどと言ってよいほど同一詞章で口説か  
れており、踊口説類の先行詞章の継承ということや、『京董跡追』  
(寛文七)『国家万葉記』(元禄一〇)『撰陽群談』(元禄十四)『兵庫  
名所記』(宝永七)等の地誌類の内容と考えあわせると、「山田の  
露」という口説きは、もう少し廻る可能性があるかも知れないとは  
思われるものの、現段階では、この本文を「忍び扇の長歌」と直接  
対比させることは避けねばならぬであろう。しかし、話の内容にお  
いては、この兵庫口説「山田の露」とほぼ同一の形で「山田白滝説  
話」が流布していた、ということと言えるであろうと思われる。

## 七

そこで、今仮に、民俗学の成果を参照しつづつ、この兵庫口説の  
「山田の露」および前掲の地誌類から、当時流布していたであろう  
と思われる「山田白滝説話」を再構成してみると、おおよそ次の様  
な内容になるのではなからうか。

人皇四十七代廢帝天皇の御宇、横萩豊成卿の息女に、中将姫と  
白滝姫しらたきひめという姉妹がいたが、妹の白滝姫が帝の一の妃となっ  
た。内裏奉公をしていた丹生山田の栗花落理左衛門くりはらふりさゑもんは、この白  
滝姫を恋初め、病となる。これを聞いた帝は恋のこころざしを

感じ、姫と歌を詠み合つて勝つたならば白滝姫を得させようとの  
仰せを下された。そこで二人は歌を詠み合い、ついに理左衛  
門が勝つて天国の御剣の守り刀とともに白滝姫をたまわつた。  
白滝姫は早く世を去り、弁財天に祭つたが、栗の花の落ちる梅  
雨時になると、理左衛門の邸宅にある梅雨の井には、今に至る  
まで水が湧き出て絶えることがない。

こうしてやつとこの説話を、「忍び扇の長歌」と対比させてみる  
段階に至つた。そうすると、この「山田白滝説話」は、「忍び扇の  
長歌」の前半部分、見初めから男が殺される部分までに対応してい  
るであろうと思われる。そこで、この両者を比べてみると、今までに  
気づかれなかつたことで次の諸点が浮かび上がってくると思われる。

- 1、姫が扇に長歌を書きつけること。
- 2、姫の守り、脇差を質に置き、切疵の膏藥を売つて生計を立てること。
- 3、姫がすぎ洗濯をし、挿絵にその場面として井戸が描かれ

ていること。

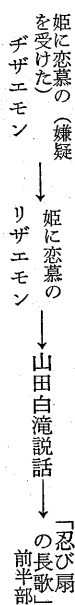
1は、「忍び扇の長歌」と表題にも採られている事柄であるが、  
これは姫と理左衛門との歌の掛け合いを下敷きにしてしていると説明す  
ることができよう。「兵庫口説」では百首の歌を詠み合うことにな  
っており、民俗芸能類でも長い掛け合いになることのある部分のよ  
うである。そして、ほとんどが姫の方から歌を詠みかけることにな  
っているのも面白い一致である。「忍び扇の長歌」では、姫から恋  
の思いを長歌にして扇に書きつけることになっている。こうしてみ  
ると、この「長歌」は、やはり金井説のごとく、万葉風の長歌ではな  
(注20)

く、端歌に対する長歌のことと思われる。つまり、恋の歌が歌謡の長歌となるところに、話を現代風に語るといふ姿勢がうかがえると思うのである。また2は、「山田白滝説話」で、水との関係において、大変重要な役割を果たしている、姫の守り刀「天国の剣」との関係を見ることが出来る。「天国の剣」が質に置かれたり、切疵の膏薬と結びついたりすると言ふことになる、やはりその表現の滑稽化が印象づけられる。さらに3の洗濯と井戸の場面は、「山田白滝説話」が湧井にまつわる話であることと関わっているのだと思われる。兵庫口説「山田の露」板本表紙には、井戸の絵が描かれるものが多いが、「忍び扇の長歌」で話の中心部分とも思われない洗濯の場が描かれるというのも、やはり「山田白滝説話」との関連を考えさせるものであるといえないだろうか。ここでもまた、「梅雨の井」から洗濯の場面が導き出されるということは、表現の現代化、滑稽化がなされているということになる。

こうしてみると、「山田白滝説話」は、話の前半部分において、そのストーリー性を担うとともに、所要所の表現を滑稽化する役割を果たしていると言えそうである。しかし、「矢都姫事件」をも原拠と考える本稿では、さらにこの上に「矢都姫事件」がどう関わってくるのかということを考えねばならない。そこで浮かび上ってくるのが、男性主人公の名前である。「山田白滝説話」では、これが、「粟栗花利左衛門」(『京童跡追』・「国家万葉記」)「粟花落理左衛門」(『撰陽群談』)「利左衛門」(兵庫口説)等と出ている。西鶴等の付合では、「つゆ左衛門」となっているが、これは、「世ニ粟花落左衛門ト称ス」(『撰陽群談』)とあるように、一般的にはそう呼

ばれていたらしい。(注21)しかし同時に、「ツユリザエモン」「ツイリザエモン」「ツイリリザエモン」等ともいわれ、そこから、兵庫口説のように「リザエモン」という名前だけが抽出される形の呼称もあったのであろう。そして、この「リザエモン」という名前が、「矢都姫事件」の家老(浅津)「治左衛門」と、ほとんど同じ発音であるということ、あるいは偶然の一致ということだけなのかもしれない。しかし、「山田白滝説話」とともに「矢都姫事件」をも原拠と認めようとする本稿においては、見逃すことのできない事柄であると思われる。

現在の白石島の盆踊りでは、「山田の露」が「治左衛門」として口説かれている。正しくは「リ左衛門」なのであるが、「リ」と「ヂ」が発音上類似であることから起った変化であらう。このことから「リザエモン」と「ヂザエモン」との類似性はうなずけることである。従って、今「矢都姫事件」をも更に視野に入れて「忍び扇の長歌」の前半部分を考えてみると、



という連想過程を考えることができる。金井氏の述べる如く、大名の事件をそのまま表現することは憚られるわけであるから、その内容をそこから連想される「山田白滝説話」に托したという考え方は十分に成り立ちうるところである。

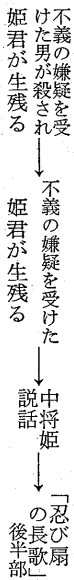
即ち、こう考えてみると、「山田白滝説話」は原拠と称すべきものではなく、真の原拠である「矢都姫事件」を托する一種の中間項

とも言うべき役割を果たすものと考えられるであろう。井上氏に依れば、原素材Ⅱ「矢都姫事件」、媒材Ⅱ「山田白滝説話」ということになる。ストーリーは、この媒材に添って進められるわけであるが、しかしすべて媒材のままに話を進めたのでは、「矢都姫事件」と異ったものになってしまう。それは、「矢都姫事件」ではデザエモンが殺されて姫が生き残るのに対して、「山田白滝説話」では、姫が死んでリザエモンが生き残るからである。そこで、少くとも「矢都姫事件」のポイントである、男が殺されて姫が生き残るといふ部分を、「忍び扇の長歌」の本文に残さなければならぬ。すると、話の叙述は、ここで「山田白滝説話」という媒材から離れて、他の媒材に移ることになる。

## 八

それでは、以下の叙述は何に托されるかという点、これが井上説で指摘された「中将姫説話」ということになる。つまり、男が殺されて姫が生き残るといふ部分が回転軸となつて、場面は「山田白滝説話」から「中将姫説話」へ移り変わるわけで、これは「早世した妹」から「生き残った姉」という連想をたどるわけである。

こうして話の後半部分は、その叙述を「中将姫説話」という媒材に托されることになるが、「矢都姫事件」からの連想は、



という過程をたどることになる（勿論、これに井上説の宇陀松山藩

から雲雀山への連想も加わるであろう。「中将姫説話」においては、継母の讒訴により、不義の嫌疑をかけられた中将姫は、殿の命を受けた従者に殺されようとするが、結局助かって尼となるのである。「忍び扇の長歌」の以下のストーリーは、これをふまえていると考えられよう。これは、井上説に既に述べられているところであるが、ただ最後の姫君の言葉で、中将姫末期の説法の滑稽化とするのは、如何であろうか。たしかに設定自体はそうした構成とも考えられるが、「忍び扇の長歌」の姫君は、涙を流して身の不義にあらざる事を訴えているわけであるから、これを滑稽化するのはやや当らないような気がするのである。むしろ、ここは中将姫が雲雀山で殺されようとする場面を考えてはどうであろうか。家来が中将姫を殺そうとした時に、姫が私は決して不義なのではないと涙を流して切々と口説く場面がある。「忍び扇の長歌」の姫君が、涙を流して訴えるのは、この部分をふまえているのだとする方が適切ではないかと思われる。

つまり、古浄瑠璃『中将姫御本地』に、

ひめ君なみだと、もろ共に、扱／＼せひなき事共かな、我が身にくもりはなき物を、……しする命はつゆちり程も、をしからね共、むじつのざんにて、むなしく也、後／＼までも人／＼の、あさけりにならん事の、はづかしさよ、

また、説経『中将姫御本地』に、

ひめ君、……をつる泪のひまよりも、くどきことこそ、あはれなれ、……水から、ぜんぜのしゆくこうにて、汝がてにかゝらん事、命においては、つゆちり程も、おしからねど、……なに

として、水からは、父にて候人には、すてられ申ぞや、  
とある部分と、「忍び扇の長歌」の、

我命おしむにはあらねども、身の上に不義はなし、……我すこ  
しも不義にはあらず、……と、涙を流したまい、  
という部分が重なるわけである。

もし滑稽化ということであれば、中将姫の切々たる口説き事  
に對して、「忍び扇の長歌」の姫君が述べる不義の例が、如何にも  
現代的であるという点を挙げてはどうであらうか。

おの／＼世の不義といふ事をしらずや、夫ある女の、外に男を  
思ひ、または死別れて、後夫を求るこそ、不義とは申べし、  
この部分が、当時の町女房の実態で、西鶴も他の部分で度々同じ叙  
述をしていることは、既に村田氏の説くところである。(注2)私は不義で  
はないのだという訴えに、こうした現代風俗を導入しているところが、  
一種の表現の滑稽化ということになるはずである。

## 九

さて、こうして本稿では、「忍び扇の長歌」を、「矢都姫事件」を  
原拠とし、それを、「山田白滝説話」および「中将姫説話」という  
媒材に托して表現したものと考えてみたわけである。つまり、「山  
田白滝説話」は、前半部分の構成とストーリー性を導き、「中将姫  
説話」は、後半部分のそれを導くものであった。そして、それぞれ  
が叙述化されるに際して、表現の現代化がとられ、そこに滑稽性が  
感じられると考えたわけである。ただ、この滑稽化ということが直  
ちに主題に結びつくという立場を本稿はとらない。何故ならば、こ

の滑稽化は媒材との関係において出てくるものであって、原素材と  
の関係から出てくるものではないからである。もし、滑稽化という  
ことを主題と考えるならば、本稿においては、原素材はあつてもな  
くても同じことになつてしまふ。「矢都姫事件」という原素材を考  
えた今、一篇の主題というものは、原素材との関わりから導き出さ  
れるのが正当であらうと思われる。

それでは、この「忍び扇の長歌」において、作者のもつとも強調  
したかった部分はどこにあるかというところ、それは、「山田白滝説話」  
および「中将姫説話」という媒材に托されつつも、なおかつ原型を  
とどめている「矢都姫事件」の部分であるということができるので  
はないか。つまり、それは不義の嫌疑で男が殺される部分である。

この部分は、「山田白滝説話」からも「中将姫説話」からも導き出  
されない「矢都姫事件」の部分である。公儀への憚りから、「矢都  
姫事件」をあらぬ事にして表現しても、なおかつそのまま残つ  
たこの部分こそ、作者の主張が読みとれるはずである。そして、  
この部分に気づけば、あとは、この部分に對して本文中にどのよう  
な意見が述べられているかを捜せばよい。即ち、男が成敗に逢つた  
という部分に對する意見は、ただ一つ、姫君の「その男は殺すまじ  
き物を」という言葉以外にはありえないだろう。

一つの社会的事件が起つた時、人々はそれに対してある感想を持  
つ。「忍び扇の長歌」が、もし「矢都姫事件」を原拠としているな  
らば、その事件をあらぬことにしなして、ただ、おもしろおかしく  
語つただけでは意味がない。おもしろおかしく話したあとで  
何か一つ話し手の意見をそれに付け加えて然るべきである。何もそ

れは人間性の主張とか封建体制への批判とかいうような「文学」的なものである必要はない。世に処するに當つてのきわめて具体的な一つの教訓である。「はなし」といふものには、そうした実用的な側面があるはずである。姫の「その男は殺すまじき物を」というのが、一つの教訓であることは、「矢都姫事件」に関する実録類を考慮に入れると一層はつきりしてくるであらう。

『織田盛衰記』（菟田郷土資料第一輯の翻刻本に拠る）は、「矢都姫事件」を次の様に評している。

警姫君治左衛門不義有女にもせよ、いゝはばい程殿様の御はじもや、浅津は七十近き、早く隠居申付、子息に家をつがせ、知行を減じ候はば何角名の立事はなし、若又不義のなきならば言し其報い誰が身かは引受ん、

また、金井氏の紹介した『宇田松山城由来記』（天理図書館蔵）も、此度治左衛門姫君と不義あるにもせよ、血て血を洗ふ諺の通り、殿の恥ゆへ、浅津は七十近き身故、隠居申付、子息に家を継せ其禄を減じ給はば事隱便にして濟べし、若又不義の無事ならば、むじつに人を罪し給ふ事、其報なからんや、と、ほぼ同様の評文であり、かかる事件に対して、こうした見方をするのが当時一般であったことは、重友氏が引用した、『窓のすさみ』第三（享保九序）にも、

或る旗本中の息女、家中の若士と密通して、彼士、息女をつれて出奔しける。主人御城に宿直の夜なりければ、そのむね書中にて達しけるに、帰りにて後申し付くべし、随分穩密にして居よと返答ありけり。翌朝退出後、立退きたるものは知れければ、偷

かに居所を聞き付くべしと、穩密に云付け、さて気分勝れず候程に、保養の爲今日囃子申し付くべしとて、客を招き、終日夜まで遊び、三日続けてそのごとくせられしかば、世上に、よもや異変はあるまじとて、沙汰するものもなくて止みけり。かくてつれ退きたるもの行衛知れば、金五十兩遣はし、まづともかくも凌ぎ居よ、追つてまた安く暮しぬる様にして遣すべしと云ひやられる。かゝりしゆゑ、世の風説なくて終へぬ。近頃事あしく取りなして、恥をひるげぬも有りし。総て近年、貴人の姉妹、又は妻女など、不義の出奔時々ありて、めづらしからぬ様なりぬ。（傍点、引用者。引用は、有朋堂文庫に拠る）とあることから何うことができよう。

「矢都姫事件」は、これが発端となり、ついには元禄八年柏原藩へ国替となるまでに事件が発展する。『西鶴諸国はなし』の貞享二年の頃は、まだ事件はそこまで発展してはいなかったが、男を殺すことによつて、世に風説を拡めたこの事件の悪しき処理方法を、おそらく当時の多くの人々はあまり適切とは思わなかつたはずである。「その男は殺すまじき物を」と訴える作中の姫君の言葉は、同時にまた、「矢都姫事件」に対する作者の感想でもあつたといふことができるのではあるまいか。

## 十

「忍び扇の長歌」について、従来の諸説を整理しつつ、そこに生まれた一つの疑問に解答を与えるというかたちで出発した本稿であるが、ここに本稿なりの結論を導き出すことができたように思われ

る。つまり、この「忍び扇の長歌」は、目録に示された如く、「恋」の話なのであるが、そのおもしろおかしく語られた恋の話の中に一つの教訓を加えたのである。それは、不義の恋に対する処理は慎重であらねばならないということであろう。「山田白滝説話」では、身分の違いしかも妃に対する恋が帝のはからいで許された。「中将姫説話」では、不義の嫌疑を受けたものが処刑の命を帯びた者のはからいで結局殺されずにすんだ。それなのに「忍び扇の長歌」（「矢都姫事件」）では、不義の（嫌疑を受けた）男を殺してしまったのである。まことに、事件を処理するものが、どのような配慮をしたかによって、事は隱便に済む場合もあり、また世に大きく恥を拡めてしまう場合もある。当時の武家にとって、この恥を拡めるということこそ、もっとも慎むべきことだった筈である。それを忘れて、不義という眼前の大義名分によってのみ事を処するということは、決して適切な処理方法とは言えないであろう。「恋」の事件に関する、かような感想を、「忍び扇の長歌」の中にもりこむということが、この一篇の「はなし」の意図であったといえるのではあるまいか。

こうして本稿では、「矢都姫事件」を原拠とし、「山田白滝説話」「中将姫説話」を媒材として作品が構成されているという立場からの読みとりを行なってみたのであるが、しかしこの立場からは「土器町」の地名を適切に説明することができない。ということは、やはり本稿の前提に誤まりや不備があるということである。ただ自らその誤まりに正解を与えることのできぬ今、本稿なりの思考過程を公にして、大方の批判をおおぐ以外に方法がない。論拠の不備、立論の強引さに気づきつつも、敢えて本稿を草した所以である。

〔注〕

- 1 「西鶴と科学」（改造社『日本文学講座』第十五卷、昭10・1）
  - 2 日本古典読本・9「西鶴」研究篇（昭14・5、日本評論社）
  - 3 「西鶴」評論と研究上』（昭23・6、中央公論社）
  - 4 岩波全書19『日本近世文学史』（昭25・10、岩波書店）
  - 5 「西鶴解説 其の一——好色五人女」をめぐって——」（『女子大國文』2、昭30・7）
  - 6 「再説「忍び扇の長歌」」（『愛媛國文研究』8、昭34・2）
  - 7 「西鶴諸國咄二題」二（『近世文学史の諸問題』、昭38・12、明治書院）
  - 8 日本古典文学全集39『井原西鶴集二』、「西鶴諸國はなし」頭注（昭48・1、小学館）の宗政氏の要約による。
  - 9 「西鶴二題」二（『近世文芸』21、昭48・1）
  - 10 「忍び扇の長歌」をめぐって」（『日本文学』、昭55・4）
  - 11 金井寅之助氏「忍び扇の長歌」の背景」
  - 12 注10の向井氏論文。
  - 13 「桃太郎の誕生」、および「北国紀行」（『定本柳田國男集』第三卷所収）に拠る。
  - 14 〈西鶴連句私注ノート〉二（『独吟一日千句』と西鶴の浮世草子）（『文学研究』46、昭52・12）
  - 15 参照し得た諸本は、大阪大学忍頂寺文庫の、  
姫路せんば御堂前灰屋輔二板「山田のつゆ」  
広嶋中嶋本町世並屋伊兵衛板「山田のつゆ」  
兵庫津本町はくや長兵衛板「山田のつゆ 代々の名譽」  
板元欠「山田のつゆ」  
板元欠「山田の露甚九ぶし」
- の諸本、また「日本歌謡集成」七所収本、白田甚五郎氏「山田白滝・5」（『国文学』昭47・5）所収本等であるが、諸所の細かな相違を除く。



て全体的にほぼ同一本文である。

- 16 なお、表現の類似ということでは、藤多津子氏が「うたおんと奥州二つ頭」考証（昭56・6、日本近世文学会春季大会口頭発表表でふれた、多びや節「奥州二つ頭」上の部分は、「忍び扇の長歌」の最初の部分と大変類似している。しかし本稿では歌舞伎狂言類との比較検討に筆を進めることができなかった。

- 17 兵庫口説については、左記の論考を参照した。

藤田徳太郎氏、校註日本文学類従『近代歌謡集』解説（昭4・6、博文館）

忍頂寺務氏「大阪に於ける兵庫口説に就て」(『上方』20、昭7・8)

山村太郎氏「大阪の盆踊歌謡兵庫口説(一)」「(二)」「(三)」「(四)」「(五)」「(六)」「(七)」「(八)」「(九)」「(十)」「(十一)」「(十二)」「(十三)」「(十四)」「(十五)」「(十六)」「(十七)」「(十八)」「(十九)」「(二十)」(『民謡研究』昭12・127、昭13・5)

島田清氏「兵庫くとき」研究の思い出(『百人一趣』下巻、昭21・12、土俗趣味社)

- 18 現在の盆踊り「山田の露」の詞章は、

嶋村知章氏「瀬戸内海白石島の盆踊」(『民族芸術』昭5・4)

本田安次氏、日本の民俗芸能Ⅳ「語り物・風流Ⅱ」(昭45・12、木耳社)

白田甚五郎氏「山田白滝」6(『国文学』昭47・6)

柳井市伊保庄公民館編『伊保庄盆踊音頭集』(昭53・8)

に収められている。なお、

広島女子大学国語国文学研究室編『芸備口説音頭集』(昭56・3、溪水社)

所収の「山田の露」のみは、詞章が大きく異っている。

- 19 左記の論考を参照した。

柳田国男氏『桃太郎の誕生』

関敬吾氏『日本昔話集成』第二部 本格昔話1(昭28・4、角川書店)

白田甚五郎氏、民俗学の探訪33/40「山田白滝」178(『国文学』昭47・178)

20 注11の金井氏論文。

21 なお、古浄瑠璃『丹生山田梅雨左衛門由来』(東京大学靄亭文庫蔵)は、内題のふりがなに、「つゆうさへもん」とある。「ツユエザエモン」歎。また、本文中には、「せつしうやだへのこうり、にうの山田といふ所に、ついに左衛門のせうしげまさとて、ちじんゆふのらうにん有、……人のいゝやすまゝにや、にうの山田のつゆさへもんとよびしとかや」とある。

22 注11の金井氏論文。

23 注6の村田氏論文。

24 注11の金井氏論文。

25 注7の重友氏論文。

26 秋永政孝氏「大和国松山藩」(第二期物語語藩史第五卷『近畿の諸藩』、昭41・8、人物往来社)

〈付記〉

本稿は、「大塚国語国文学会全国大会」(昭56・9・23)および「研究と評論の会例会」(昭56・12・5)の口頭発表を整理補筆したものである。席上諸氏より様々の御注意をいただき、本稿に生かすことができた。また、本稿を成すに当って、信多純一・神保五彌・村上省吾・廣吉壽彦・浅川征一郎の各氏に資料の閲覧についての御高配また資料に関しての御教示をたまわった。なお、資料の閲覧には、大阪大学附属図書館、天理大学附属天理図書館、奈良県立奈良図書館、東京大学総合図書館、早稲田大学図書館、東京都立中央図書館、国立国会図書館を利用させていただいた。さらに、暉峻康隆先生の御指導および井上敏行氏の論文に負うところが大きいことをも付記し、併せて厚く御礼申し上げたい。